

尾崎一夫のための追悼

私たちは、父尾崎一夫の死を悼むためだけではなく、その生涯と、生きてきた姿勢、そして周囲の人々に惜しみなく注いだ愛を称えたいと思います。

父は、1932年12月13日に、日本の南に位置する主要港町の下関で生まれました。容易に想像できますが、幼い頃から海に惹かれていました。精密さ、忍耐力、そして先見性を要する造船技術を学びました。その学びは、相応しい選択でした。なぜなら、父の人生そのものが、まさにそれらの資質を表わしていたからです。しかし、神が父に造らせようとした器は、木や鋼鉄でできたものではなく、言葉と信仰、そして目に見えない電波でできたものでした。

大学で父は、父の生涯の愛となり、その使命を揺るぎなく支える方と出会いました。私の母でした。二人は、共に奉仕の航路を定め、大海原を渡り、人々の心に届きました。中には直接会うことのない人々もいましたが、手紙と忠実な受信報告への返信を通して、深く知り合うようになりました。2006年に母が天に移された後も、父はかつて二人で分かち合った働きを推し進めていったのです。62年間、父は揺るぎなくラジオ放送の電波宣教師として奉仕しました。決して引退することなく、マイクから離れることもありませんでした。ラジオ放送は単なる仕事ではなく、父にとって生涯の使命でした。放送を聴く方々は、単なる聴衆ではなく、父にとって会衆であり、父の宣教地にいる方々であり、深い喜びそのものでした。

父の声は安定した灯台の光のように電波に乗って届き、聴く人々を導き、慰め、励ました。父はキリストの愛を明快に、かつ確信をもって語り、人生の航路における真の北極星として常に十字架を指し示しました。船が海図と羅針盤を必要とするように、人の魂には福音が不可欠だと父は理解し、そのメッセージを疲れることなく誠実に、そして喜びをもって提供し続けました。

その使命への情熱にもかかわらず、父の六人の孫たちと二人の曾孫たちへの愛情に勝るものはありませんでした。彼らの中にいると、父の心は最もくつろいだのです。彼らの側にいると、父の目は輝き、笑い声はより自然に、より豊かに、より深く響きました。父は自らの人生を導いた同じ愛と信仰を、彼らに注ぎ続けました。

最期の日が近づくまで、父は健康で活力に満ち、目的意識に溢れていました。精神的に決して衰えることはありませんでした。まるで、毎日が神からの贈り物であるかのように生き、神の霊の風を受けた帆のように、永遠の港へと推し進められていくかのようでした。ついに、アリゾナの時間で2025年9月16日午前2時30分、永遠の故郷であるその港へ辿り着きました。

使徒パウロは、新約聖書のテモテへの第二の手紙4章7節にこのように記しています。

「私は、闘いを立派に闘い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」父はなすべきすべてを、さらにそれ以上を成し遂げました。父は単に走り終えただけでなく、奉仕の船の舵を握り、水平線を見つめ、魂の船長を信頼しながら、全速力で人生の航海を続け、まさにその終着港まで辿り着いたのです。

今や、この世での父の航海は終わり、父はあの天の岸辺に辿り着きました。そこには嵐は吹き荒れず、すべの涙は拭い去られています。父はきっと、生涯切望していた言葉を既に聞いていることでしょう。「よくやった。良い忠実な僕よ。」

このような言葉では父の人生の深さと美しさをほんの少ししか伝えられません。

“お父さん、お父さんの人生と愛と信仰と遺産を感謝します。天の港で再び逢う日まで、お父さんの光と笑い声と教えと愛を、私たちは受け継いでいきます。”

(尾崎道夫)